

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008～2009

課題番号：20791691

研究課題名（和文） 透析患者の変化ステージ別レディネス把握ツールの開発

研究課題名（英文） Development of dialyzed patient's readiness grasp tool according to change stage

研究代表者

恩幣 宏美 (ONBE HIROMI)

群馬大学・医学部・講師

研究者番号：20434673

研究成果の概要（和文）：

目的：本研究の目的は、①看護師の効果的な行動変容支援に繋げるために、透析患者における Prochaska の変化ステージ別におけるレディネス関連要因を明らかにすること、②透析患者のレディネス関連要因を把握した上で、臨床において使用できるレディネス把握のためのツールを開発する、③レディネスの必要条件にある態度について質的研究で明らかにすることである。

方法：本研究では行動変容でも特に食事管理行動について検討した。レディネスの必要条件として「身体的・神経系の成熟、すでにもっている知識や技能、興味や動機や態度」があるが、その中でも態度の概念が漠然としており、先行研究でも明らかとなっていない。また、血液透析患者の食事管理における態度は明らかにされていない。そこで、血液透析患者の食事管理における態度を明らかとするため、質的研究(エスノグラフィー)を実施した。

結果・考察：態度とは「人や事物、社会問題に対してもつ、一般的で持続的な、肯定的または否定的な感情」であり、感情、認知、行動の3成分をもっている。その3成分に対してデータ収集を行い、分析した結果、行動では、今回の対象は全て検査データ良好な透析歴が長い患者であったが、調味料などを1回ごとに計測するのではなく、経験知から目分量で調理を行っている対象が全員であった。その中でもカリウムが高いことを恐れる感情があり、生野菜の制限を行っていないが、必ず水でさらすという行動を行っていた。どの対象も透析導入時は栄養士の食事指導を厳密に行っていたが、毎日の調理や食事内容と検査データとの関係を振り返ることで、自分なりの経験知を習得し、徐々に厳密な管理から目分量での管理と移行していった。その行動を支えている要因の一つとして、家族の存在が示唆された。

研究成果の概要（英文）：

Purpose: To tie to the nurses effective behavior modification support, the purpose of the present study clarifies the factor in each change stage of Prochaska in the dialyzed patient related to readiness, and the tool for the readiness grasp that can be used is developed after it understands in clinical, and the factor of the attitude that exists in the necessary condition of readiness related to readiness the dialyzed patient is clarified by the qualitative study.

Methods: The behavior modification was especially examined about the meal management action in the present study. Clearly in the especially concept of the attitude vague, descending, and the previous work though "Knowledge, skill, interest, motive, and attitude that matures about a body nervous system, and has already had it" is necessary conditions of readiness either. Moreover, the attitude in the patient with receiving hemodialysis's meal management is not clarified. Then, to assume the attitude in the patient with receiving hemodialysis's meal management to be clear, the qualitative study (ethno graph) was executed.

Results and Discussion: The attitude is "General, continuation, affirmative or negative feelings with the person, things, and the social trouble", and it has three elements (feelings, acknowledgment, and the action). The seasoning etc. were not measured every one time,

and the object that cooked from experience wisdom by rule of thumb was all members in the action in this object as a result of collecting data for the three elements, and analyzing it though dialysis [**] of inspection excellent data were long all patients. It acted though there were feelings to fear that especially potassium high, and the raw vegetable was not limited, that is, exposed it without fail in water. Experience wisdom of my own way was acquired to look back on cooking of every day and the relation between the content of the meal and the inspection data, and it shifted from strict management gradually with management by the rough estimate though it went strictly in dietitian's dietary instruction when any object introduced the dialysis. The family's existence was suggested as one of the factors to support the action.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	2,000,000	600,000	2,600,000
2009年度	1,300,000	390,000	1,690,000
年度			
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・臨床看護学

キーワード：レディネス、透析患者、態度、アセスメントツール

1. 研究開始当初の背景

①透析室における患者教育の実情

透析を必要とする患者は年々増加しており、導入に至る原疾患も糖尿病性腎症が2006年末で導入患者全体の42.9%であることから、近年の透析患者は腎不全に管理に加え、糖尿病の管理という複雑な自己管理が必要となっている。透析室で看護師が実施する患者教育においても、腎不全と糖尿病の双方への教育が必要となり、看護師の患者教育は以前に増し困難さを呈している。しかし、透析患者への患者教育は透析中という限られた時間内で行うため、効果的に行うことが求められる。また現行の患者教育は、決まったプロトコルはなく、看護師の能力に依拠している部分が大半である。また透析導入時には決まった項目に沿って指導が実施されるが、透析維持期に入ると十分な指導や支援が実施できていないのが現状である。

②効果的な患者教育に繋がるレディネスの把握

患者教育は集団教育も効果があるが、透析患者のように原疾患や透析に伴う合併症の出現も様々な場合は、個別教育の方が効果的な行動変容支援に繋がると考える。しかし、

個別教育を行うにも患者アセスメントから実施に至るまでには多くの時間を要する。行動変容が必要な患者に対するアセスメントの一つに「レディネス(学習準備状態)」がある。レディネスの把握は、医療のみならず教育、心理、社会学など幅広い分野で使われており、行動変容支援における患者アセスメントとして有用性が確認されている。このことから、患者アセスメントとしてレディネスを把握した患者教育が行えると、患者のみならず看護師にとっても効果的かつ利便性があると言える。

2. 研究の目的

本研究の目的は、

- ①看護師の効果的な行動変容支援に繋げるために、透析患者における Prochaska の変化ステージ別におけるレディネス関連要因を明らかにすることである。
- ②透析患者のレディネス関連要因を把握した上で、臨床において使用できるレディネス把握のためのツールを開発することである。
- ③レディネスの必要条件にある態度について質的研究で明らかにする。

3. 研究の方法

1)レディネスの文献研究

透析患者の変化ステージ別レディネス把握ツールの開発に向け、まず文献研究を行う。透析患者のレディネスの把握は、患者教育を行う際に患者アセスメントとして行うものとする。そこで、透析看護における患者教育とは何かについても文献研究を行う。

レディネスはあることを学習するとき、これを習得するために必要な条件が用意され、準備されている状態」であり、必要な条件は一般的に身体的・神経系の成熟、すでにもっている知識や技能、興味や動機や態度などがある。この条件の中で態度という概念が抽象的であり、先行研究等でも血液透析患者の食事管理に対する態度は明らかとなっていないため、血液透析患者の食事管理に対する態度を質的研究(エスノグラフィー)で明らかにする。

2)態度について

態度の3成分のうち主に行動は参与観察で、感情と認知については半構成的面接でデータ収集を行う。データ収集は京都府、群馬県、宮城県の3府県で9人を対象に行う。行動を明らかにするための参与観察では調理実施場面を観察し、感情や認知についてインタビューガイドを作成し面接を実施する。

①データ収集方法:

研究に同意が得られた対象 10~20 名に対し 1 人約 30 分~1 時間の半構成的面接を実施する。面接前に面接で具体的にどのようなデータを得たいのかということをも最初に丁寧に説明する。面接の際の質問項目は、別紙インタビューガイドに沿った内容で質問を行い、その後自由に語って頂く。面接での会話は同意の下で、ボイスレコーダーで録音する。半構成的面接は対象の希望に応じて、自宅または透析室で行う。面接と参与観察は同時並行で行われ、状況によっては 2~3 回程度実施する。

また対象に対し、自宅等で食事管理を行っている場面の参与観察を行う。その理由は、食事管理は知識を持っているだけで実施することが困難であり、自己申告だけでは捉えられない患者自身それぞれの経験や個別的に工夫をしながらの行為であるため、直接観察することが重要だと考えた。また、態度の定義の中に「行動」も入っていることから、本研究で食事管理に対する態度を明らかにするために、参与観察を行うこととした。自宅での参与観察で観察した場面や物品等は、同意の下デジタルカメラで撮影を行う。参与観察の場面は、①買い物をしている場面、②調理を行っている場面、③食事摂取の場面を観察し、参与観察終了後に観察内容をフィールドノーツに書きとめる。参与観察の場所は

対象の希望に応じて、買い物場面はスーパー等であり、調理および食事摂取場面は自宅で行うこととする。また、対象が外食で食事を済ませている場合は、外食を行う店で研究者も共に食事をしながら、データ収集を行う。また、フィールドワーカーの役割は 4 つ(完全な参与者・積極的な参与者・消極的な参与者・観察者のみ)あるが、本研究における役割は消極的な参与者の役割を取る。この役割はフィールドに入っているが、その場の人々の日常生活の流れを乱さないように、片隅に観察場所を確保し、対象者との交わりは向こうから話しかけられた時くらいにとどめる。しかし、対象の食事内容が生命に直結する状況である場合、医療者として適切な処置および助言を行うこととする。また、参与観察と半構成的面接の回数であるが、必要なデータが確保できるまで収集する必要があるため、対象と相談の上必要であれば 2~3 回の家庭訪問等を実施する。

②データの分析方法

データ分析方法は、記述民族学(エスノグラフィー)を用いる。また、データ収集とデータ分析は同時並行で行う。半構成的面接でのデータは、ボイスレコーダーで録音した内容から逐語録を作成する。また、参与観察でのデータは、対象者の非言語的な行動や顔の表情などフィールドで得られた事柄、研究者自身がツールとなってフィールドを解釈した事柄であり、それをフィールドノーツとする。

<半構成的面接>

① 半構成的面接と参与観察は同時並行で行われる。半構成的面接では、インタビューガイドに基づいて行われるものと、参与観察の途中での会話も含める。

<参与観察>

対象者：いつも通り、ありのままの食事管理状況を遂行してもらう。

研究者：

① 1 回目の参与観察ではフィールド(買い物および自宅)に入ったらず、フィールドの全体を記述し、フィールドで何が起きているのか、フィールドの全体像をつかむ(記述段階)。次に記述段階でのフィールドノーツを基に、どのような事象が頻繁に出現しているか、研究者が興味をもった事象は何かを見極め、その 2、3 を取り上げて集中的に観察する。その際、研究設問を立て、どこで何を観察するのがよいのか、観察の焦点を決める(焦点観察)。焦点観察で集められたデータを分析し、そうしたデータを見ていくための概念枠組みを見つけ、新しく析出した概念カテゴリを使ってさらにデータを収集する選択的観察へ移行する。その後リサーチクエスチョンをたて、それを明らかにするための事象に対して焦点を当てて観

- 察する。
- ② リサーチクエスションに関係がありそうなイベントや事項をフィールドノートから拾い、比較対比することで、類似点からカテゴリを同定する。その後新しいカテゴリを使ってフィールドノートを再分析し、事象間の関係を記述する。事象間の関係性の記述が仮説となる。
 - ③ 以上の分析過程を経て、最終的にエスノグラフィーの作成を行う。

4. 研究成果

1) レディネスについて

透析患者の変化ステージ別レディネス把握ツールの開発に向け、まず文献研究から開始した。透析患者のレディネスの把握は、患者教育を行う際に患者アセスメントとして行うものとする。そこで、まず透析看護における患者教育とは何かについて文献研究を実施した。研究目的は先行文献から透析看護における患者教育の定義と必要な要素を明らかにするである。結果、要素の検討から、透析看護における患者教育の定義が明らかとなり、透析看護の患者教育に必要な要素として、「透析や腎疾患に特化した知識・技術提供」「疾病・透析受容を踏まえた関り」があった。また、レディネスの文献研究として透析看護における文献からレディネスを使用している文献数と定義を明らかにした。結果、透析看護の中で、レディネスを定義している文献はなかった。レディネスとは Prochaska が述べている変化ステージのみでなく、教育・学習心理学でも使用されている言語である。また、レディネスは特定の教科や行動に対して把握する概念であることから、本研究は食事管理に対するレディネスを把握することとした。まず、学習心理学や教育心理学の書籍等を中心にレディネスの概念および研究を見た。レディネスはあることを学習するとき、これを習得するために必要な条件が用意され、準備されている状態であり、必要な条件は一般的に身体的・神経系の成熟、すでにもっている知識や技能、興味や動機や態度などがある。そこで、必要な条件を把握することがレディネス把握に繋がると考えた。アセスメントツールの構成要素は、身体的・神経系の成熟、すでにもっている知識や技能、態度であり、現在ツール開発に向け態度についての研究を進めている。血液透析患者の食事管理に対する態度とは何かが明らかとなっておらず、平成 21 年度の研究は、血液透析患者の食事管理に対する態度を質的研究(エスノグラフィー)にて明らかにしていった。

2) 態度について

態度とは、「人や事物、社会問題に対して

もつ、一般的で持続的な、肯定的または否定的な感情」であり、感情、認知、行動の 3 成分をもつ。そこで、3 成分のうち主に行動は参与観察で、感情と認知については半構成的面接でデータ収集を行った。データ収集は京都府、群馬県、宮城県の 3 府県で 9 人を対象に行った。行動を明らかにするための参与観察では調理実施場面を観察し、感情や認知についてインタビューガイドを作成し面接を実施した。結果、行動では、今回の対象は全て検査データ良好な透析歴が長い患者であったが、調味料などを 1 回ごとに計測するのではなく、経験知から目分量で調理を行っている対象が全員であった。その中でもカリウムが高いことを恐れる感情があり、生野菜の制限を行っていないが、必ず水でさらすという行動を行っていた。どの対象も透析導入時は栄養士の食事指導を厳密に行っていたが、毎日の調理や食事内容と検査データとの関係を振り返ることで、自分なりの経験知を習得し、徐々に厳密な管理から目分量での管理と移行していった。その行動を支えている要因の一つとして、家族の存在が示唆された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 8 件)

- ① 安田真知子, 恩幣(佐名木)宏美, 他、在宅療養を望む終末期がん患者の看護～主介護者に焦点をあてた支援の検討～、日本透析医学会雑誌、査読有、43(5)、2010、in press
- ② 恩幣宏美, 他成人看護学実習を履修した看護学生のヒヤリハットに対する知識と認識について、群馬保健学紀要、査読有、30、2010、9-18
- ③ 恩幣(佐名木)宏美, 他透析看護における患者教育の定義と必要な要素の検討、The Kitakanto Medical Journal、査読有、59(2)、2009、145-150
- ④ 高橋さつき, 岡美智代, 恩幣宏美, 佐藤久光, 杉田和代, 田村幸子, 看護師が外来で行う慢性腎臓病 1~4 期の患者教育実施率と実施に影響を及ぼす「構造」の分析、日本透析医学会雑誌、査読有、2009、363-368
- ⑤ 恩幣(佐名木)宏美, 他、日本腎不全看護学会関東地区セミナー参加者の実態調査 セルフケアを学ぶ看護職の心理に着目して、日本腎不全看護学会誌、査読有、11(2)、2009、70-76
- ⑥ 柿本なおみ, 恩幣(佐名木)宏美, 岡美智代、血液透析患者の下肢の運動行動の向上に EASE プログラムを用いた介入の効果、Kitakanto Medical Journal、査読有、59(2)、2009、137-153
- ⑦ 恩幣(佐名木)宏美, 他、EASE プログラムに関

する文献研究、日本腎不全看護学会誌、査読有、10(2)、2008、80-85

- ⑧ 高橋さつき、岡美智代、李孟蓉、恩幣(佐名木)宏美、慢性腎臓病における患者教育プログラムの経済性に関する文献研究、日本腎不全看護学会誌、査読有、10(2)、2008、73-79

〔学会発表〕(計 31 件)

- ① 高橋 さつき、岡 美智代、恩幣 宏美、杉田 和代、外来で行う慢性腎臓病 1～4 期の個別教育の実施率と、実施に影響を及ぼす“構造”、第 29 回日本看護科学学会学術集会、2009 年 11 月 27 日、千葉
- ② 恩幣宏美、他、糖尿病性腎症患者における糖尿病治療・療養中断に対する思い、第 24 回日本保健医療行動科学学会学術集会、2009 年 6 月 27 日、神戸
- ③ 恩幣(佐名木)宏美、他、透析看護の患者教育に関する文献研究、第 11 回日本腎不全看護学会学術集会・総会、2008 年 11 月 30 日、名古屋
- ④ 恩幣(佐名木)宏美、他、研究成果から透析看護の発展について考えるーレディネスという患者理解に焦点を当ててー、第 11 回日本腎不全看護学会学術集会・総会、2008 年 11 月 30 日、名古屋
- ⑤ 恩幣(佐名木)宏美、他、糖尿病患者のフットケアに対するレディネスと足病変の関連について、日本慢性看護学会学術集会、2008 年 6 月 22 日、東京

〔図書〕(計 2 件)

- ① 恩幣宏美、メヂカルフレンド社、根拠がわかる在宅看護技術、2008、17
- ② 岡美智代、恩幣(佐名木)宏美、医学書院、病期・病態・重症度からみた疾患別看護過程＋病態関連図、2008、15

6. 研究組織

(1) 研究代表者

恩幣 宏美 (ONBE HIROMI)

群馬大学・医学部・講師

研究者番号：20434673

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：